



21世紀のカイロプラクターへのメッセージ

日本のカイロ発展と JCAが果たした役割

Leadership of the JCA in the 20th Century

会長 竹谷内 宏明

昭和36（1961）年、7団体で「全日本カイロプラクティック総連盟」（その後、日本カイロプラクティック総連盟と改称）を創設して以来、西暦2000年を迎えようとしている、平成11年度末の現在までの39年間、JCAはこれまでにこの業界に多大な影響を及ぼす、様々な活動をし、事業を展開してきた。その間を、創成期、模索期、活動期、混乱・修復期そして現在の発展期に大別すると、過去のいきさは別として、注目すべきは、世界のカイロプラクティックの発展と歩調を合わせるべく、JCAが事業を推進させてきた、特に、この数年の発展期の歩みであろう。

これまでの常識の急変

研究、普及の面では、世界のカイロプラクティックの発展と変化は誠に目覚ましく、DC達さえ、多くはその変化についていけない中で、JCAのみがその舵取りを誤らなかったのは決して偶然ではなかった。39年間に亘る実績の蓄積と常に世界に向けて目を開いていたからの必然的な結果といえるであろう。

JCAの先見の明

世界のカイロプラクティックの現在の常識では、かつてJCAが行い一定の成果を果たしたとさえ自負できるJCAカイロ学院も「悪」である。けれども、JCAの先見の明は、世界が「悪」とする前に、そのカイロ学院の廃止を決定したことにある。JCA以外の日本のカイロプラクティック関係者は未だに、その「悪」の意味を殆ど理解できないし、しようとしていない。

RMIT日本校と、JACの意義

39年間のJCAの歴史の中で、RMIT日本校の導入とJACのWFCへの加盟の二つは特筆すべきで、多くのことを意味して

いる。それを要約すると、法制化を視野に入れられない現在、カイロプラクティックの本物とそうでないものとを、WFCを後ろ盾に、JCA、JACという業者がその意志と実行力があれば区別することが可能であることである。

本物とそうでないものの違いを明確にするためには、まず、本物を身近に目で見せる必要がある。けれども本物といっても、海外の国際基準の大学を誰もが簡単に見ることはできない。それを実現したのがRMIT大学日本校の開校であり、さらにはCSCの開始であった。

本物を養成し、輩出することで、そうでないものとの違いを初めて明確にできる。JCAが問われているのは、今後、その明確な違いをいかにして日本の国民に知ってもらうか、どのように宣伝していくかにあると思う。

本物志向の時代のニーズに応える

現在、日本でもインターネットの普及は私たちの想像を遥かに超えている。WFC（世界カイロ連盟）の会員つまりJACの正会員だけが、本物のカイロプラクターであると日本中の人に理解してもらうことは、やり方次第ではそれ程困難ではないであろう。

JACがある一定の人数を確保できれば、その名簿を厚生省に提出できるし、誰もがインターネットで名簿を知ることが可能となる。これからは何事についても、どれが本物であるかを問われる時代になる。JCAはカイロプラクティックの本物を養成してきた。それはJCAの長年の努力が実を結んだのであって決して偶然ではない。

RMIT開校の経緯

JCAとドクタークレイハンスとの交流

がなければ、さらにJCAのDCがエンタープライズ社に、スコットハルデマンの学術書を始め、多くの学術書の翻訳を依頼し、翻訳に携わって出版していなければ、RMIT日本校は存在しなかった。欧米のカイロプラクティックの高度な学術書が日本語に翻訳されていたのが国際基準の教育機関の開校につながったことは、ドクタークレイハンスが繰り返し述べている。JCAはRMIT日本校の構想を考える以前に、学術書翻訳の必要性に注目していたのである。開校に当たり講師の中心となってくれたDCの存在にも恵まれた。JCAの会員が東邦大学等の基礎医学の人脈との交流があって開校をスムーズにさせてくれた。

賠償保険の導入とカイロ学院

JCAが果たした役割でさらに言及しなければならないのは、JCAカイロ学院と賠償保険制度の導入である。現在の世界基準で当てはめれば、「悪」であっても、通信講座（系統教育）から発展させたカイロ学院は、開校当時は画期的であり、それ故に一部業者からやっかみで金儲け主義と非難された程である。約450名の認定カイロプラクターを輩出させたことが、結果的にCSC導入を容易にさせることにつながったと思う。そのJCAカイロ学院に、自ら終止符を打ったことも、JCAは評価されてもよいであろう。DCと学生以外に新規の入会の道を自分から閉ざした団体は他にはないと思う。

保険会社の事情により他団体と組んでの導入であったが、カイロ賠償保険制度の導入も大きな業績であり、JCA会員を安心させたが、それを契機に他団体も賠償保険を導入するようになった。18年間で5件の支払が生じたが、そのうちの

件は、金銭目当ての言いがかりとしか解釈の出来ないようなケースで、賠償保険の必要性を痛感させられた事件ではあったが、カイロプラクティックの安全性は証明されたと考えている。

研究活動はJCAの一人舞台

JCAの活動歴を振り返れば、枚挙に遑がないといってよいであろう。その中で、JCAのみしか行い得なかったことは研究活動である。

カイロプラクティックの研究に関するJCAの取り組みに対して、これまでは他の団体は全くの傍観者だったといってよいであろう。自律神経反射の世界的権威である、元老人研の佐藤昭夫先生にいち早く接触し、佐藤先生のもとへ2人のDC、ドクタースエンソンとドクターバジェルを送り込んだのもJCAの功績である。国内外へのカイロプラクティック研究に対する寄付も、共同だった場合を除き、JCA以外に行った団体はないではないか。その詳細な金額は、本誌に掲載されている。

カイロプラクティックの学術大会である、臨床カイロ学会を7回まで自前で継続させてきたのも、JCAだからこそできたと確信している。

海外との交流の発端

海外のカイロプラクティック事情視察や日本では難しい解剖実習を外国で先駆けたのもJCAであり、その後各団体も追従し、行ってきた。

海外の講師による国際セミナーは昭和40(1965)年、ナショナル・カイロ大学の学長、ドクタージェンシーを招聘したのが日本での初めての試みであった。当時の役員たちは、採算の目処が立たない中を、自らが資金を拠出しあつての開催であったが、結果的には大成功で、それ以来20回を超える国際セミナーを経験している。

WFCの素人へのセミナー禁止

それ以降、外人講師のセミナーは各団体、企業によって現在までに数多く開催されてきている。殆どがテクニックを不特定多数に教えるという、数年前までは「悪」ではなかったセミナーが、1997年のWFCによる国際教育憲章採択以来、「悪」になった。このことにいち早く気づき、実践したのはJCAだけである。

時代の趨勢で、以前には問題視されなかったことが、後に「禁止」になったのは数多くあるが、カイロプラクティックのテクニックを素人に教えてよいか否かの答は昔も今もノーである。けれども、正しいかどうかは別にして、日本にカイロプラクティックを普及させるにはやむを得ないこともあったと思っている。しかし時代は急激に変化している。

WFCは、現在、国際基準の教育を受けたカイロプラクターのみを世界に普及させるべく、強い意志で臨み、実践しつつある。いい加減なカイロプラクティック教育に関しては、学校教育であれ、個人レベルのセミナーであれ、絶対に許さないとの姿勢は非常に強固である。

日本独自のカイロは存在するか

DCを含めて、日本の業者の中には少なからず、我が国には法律がないのだから、必ずしもWFCと歩調を合わせる必要はなく、日本独自のカイロプラクティックがあってもよいと主張する者がいる。説得力がありそうな意見ではあるが、カイロプラクティックはアメリカから来たものであり、独自のものではない。日本独自に似た様な治療法はあってもよいと思う。けれども、カイロプラクティックの名称に拘るのであれば、WFCの意向に従うべきである。そうでなければ世界に2種類のカイロプラクティックが存在してしまう。それだけは阻止しなければならない。

日本でカイロは発展してきたか

現在、日本でWFCと共同歩調が可能なのは、JCA、JACのメンバーを除いたら、一部のDCしか存在しない。

日本のカイロプラクティックは発展してきたか、そして、しているかとの本題に対する回答は難しい。法律がない故、カイロプラクティックはいびつな形で発展、普及してきたとも言える。

いびつな形の存在が世間やマスコミ、医学会にカイロプラクティックを誤解させ、正しい評価を得ることを困難にしてきた。そして一度、悪評を得てしまうと、その回復には多大な時間とエネルギーを要する。

一人一人が患者を治療することで世間のカイロプラクティックの評価を得るのが地道で正しい普及活動であることは当

然である。けれども、それだけでは余り策がないと言われても仕方がない。

JCAの今後の役割

良きにつけ悪しきにつけ、JCAは創立以来、日本のカイロプラクティック発展に多大な影響を及ぼしてきた。そして今後のJCAとJACの役割は、日本中に正しいカイロプラクティックを理解させ、普及させることにつく。

医学会の誤解を解き、理解を得るのは至難の技であり、法制化もまだ視野には入れられない。けれども我々は、普及活動の条件と準備は整ったと思っている。航空機に例えるなら、目的地に向かってまさに離陸した状態といえるであろう。安定した水平飛行に入るためになさねばならぬことは、何であろうか。新規の希望者には本物のカイロプラクティック教育を提供し、既存の開業者にはCSCを導入し、軌道に乗せた。WFCとも太いパイプで繋げることができた。そして将来のこの業界を担う真の人材が育成されつつある。

反対の多い医学会の中にも、一部の整形外科医の中にはカイロプラクティックの理解者が現れ始め、また代替医療の見直しを主張する医師たちも少なからず存在する時代になった。JCAは機会ある毎に厚生省健康政策局に三浦レポートの見直しを依頼してきたし、今後も要求し続けるであろう。

将来の展望

西暦2000年3月、日本で初めて自前のDCである、RMIT大学日本校の1期生が卒業する。これは業界にとって歴史的で画期的なことであり、カイロプラクティック業界に大きな変革をもたらす第一歩が始まる。そして、私自身はそろそろ業界活動を次の世代にバトンタッチする時期に来ていると考えている。

私たち旧世代は、カイロプラクティックが発展するための基礎作りには微力ながら尽くしてきたと自負している。その基礎を元に、更に飛躍させるのは次世代の関係者の役割であり、責任であると思う。

日本のカイロプラクティックの発展はまさにこれからであり、JCA、JACの果たすべき役割はまだ多いが、21世紀に向けてその展望は明るい。



これからの時代 JACの役割

Future role of the JAC in the 21st Century

会長 中塚 祐文

2000年3月日本で始めて国際基準で学んだ和製カイロプラクターが誕生します。これこそ新しい日本のカイロプラクティックの歴史の幕開けということが出来るでしょう。私達はどのようなカイロプラクティック業界を作ろうとしているのでしょうか？私達の行く道は私達が切り開いていくしかありません。

2010年には日本は数の上では世界でも屈指のカイロプラクティック大国になっているはずですが。その時に私達がどのような業界の青写真を持って活動しているかということは非常に大切なことです。私達が考えている青写真とはどのようなものでしょう。

(1) 国際公認の教育。国際水準のカイロプラクターが誕生すること。いかにレベルが高いと言っても自己満足ではいけません。つまり、認可を受けた大学にすることが、卒業生の質の確認、向上に繋がることになるのです。学校の淘汰も起こることでしょう。統廃合が起こり、本物だけが残ることになるでしょう。海外から日本に進出する大学もあるでしょう。その仲立ちをすることも必要になるでしょう。これからカイロプラクティックのビッグバンが起こるわけです。その舵取りをするのが必要になるでしょう。(学校評議会) (認可諮問評議会)

(2) 研究の推進。現在、研究の存在なしにはカイロプラクティックの発展はないと言い切る指導者が多くいることでも分る程、研究を進めていくことは必要です。自分の経験や先輩の経験といった限られた情報でなく、エビデンスベーストアプローチを可能にするためにも研究は欠かせません。多くの研究組織からカイ

ロに関する研究をしたいとオファーが寄せられています。そのために基金を集めて優秀な研究を援助する団体が必要になります。(脊柱研究基金)

(3) 客観性。客観的にカイロプラクターの質を一定するためには、中立な立場で試験をすることも大切になってきます。自分が本当に基準に達しているかを知ること大切です。合格する数がその学校のセールスポイントにもなるでしょう。そのことが学校の質を改善していくことにもなるでしょう。そのような試験を行なえるような基盤を作っていくことが大切になるでしょう。(国家試験)

(4) 認定。カイロプラクターが真に認められるカイロプラクターになるためにはカイロプラクターを登録する機関も必要になるでしょう。将来的には免許の発行と管理を含む事業を行って、卒業生のレベル、ならびにカイロプラクターの倫理面からの指導をしていくようになるでしょう。(登録機構)

(5) 業界の充実。以上に挙げたことが進んでいけば、強力な業界団体の発展は当然の結果として起こってきます。業界が一つの声として発言できれば強力な力を持ていきます。同時に多くの代替補完医療の他の業界と足並みをそろえれば、発言力はもっと大きくなるでしょう。また、健康に関心のあるグループと関係を強めていくことにより、私達は足元から確固とした地盤を築き上げることが出来るでしょう。スポーツなどを通じてカイロプラクティックの有効性をアピールしていくことも大きな力となるでしょう。(一つの業界団体) (スポーツ評議会)

このような活動というのは我々がこれ

まで行ってきた活動に他なりません。ただそれをもっとバージョンアップして、国際レベルに引き上げていくということが必要となります。このような団体は立ち上げる際にはJACが全面的にサポートしていきますが、将来的には独立した団体となります。現在そのような方向性をまず付けたという段階です。このような団体が機能するようになった時に法制化になっていない状態を私は想像することが出来ません。このような過程で私達は多くの仲間を得るようになります。そのような仲間が一致した時の力を想像するとわくわくしてきます。

私は竹が好きです。竹はまず地面にしっかりと根を張ります。地面の中でお互いにしっかりと手を繋ぎ合うようにつながっています。根がきちんと成長するまでは上に伸びようとはしません。しっかりと根を張ると今度は天をめざして真直ぐにみるみる伸びていきます。どんな障害物があってもそれを突き破って天をめざします。一度伸びると雪や雨に耐え、どんな厳しい状態でもそれで倒れるということはありません。それを乗り越え凍と天を向いています。

いままで、私達はしっかりと根を張る作業をしてきました。私達の前には様々な困難や問題が立ちはだかるでしょう。困難が大きければ大きいほど私達のなさんとしていることは偉大なことだと言えるでしょう。2000年を迎える今、天に向かってまっしぐらに伸びていこうではありませんか。私達の輝かしい21世紀を私達の手で勝ち取るために。

